

音楽中心的音楽療法の特色を活かしたスーパー ビジョンの適応と体験的学びを通じた育成の充足： 試行の結果と更なる提案

長江 朱夏

Adapting the Uniqueness of Supervision and Experiential Learning with Music-Centered Music Therapy Approach for the Undergraduate Music Therapy Training Program: Reflection from a One-year Trial

はじめに

音楽療法士の育成は、コンピテンシーを基軸としている。これは、単位取得のみが知識や技術の習得を表す指標となるのではなく、将来音楽療法士として仕事をしていく上で求められる様々な知識と技術を本人が身につけ、実践できる能力を育てることを目安としている。学部レベルにおいて、様々な能力と個性を持つ学生を育成するにあたり、指導者にも多様な工夫が求められている。学生にとっては、幅広い分野とそれに合わせた知識を提供されること、そしてどのような現場で働くことになっても役立つ基本的な技術習得の達成が大切である。私は、形式に沿った学びも然ることながら、学生自身が自らの力で考え判断しながら推し進められる力を培うことが、将来現場へ巣立った時に発揮される大きな支えとなると考えている。限られた時間の中でセラピストを育てる為には、学生自身が自らの感覚と感性を磨き、自分の力を信じられるように育成することが大切である。このためには、自らが気づき、洞察を深め、学びと自己の成長へとつなげる取り組みが必須となる。

私がトレーニングを受けた米国教育機関では、ロールプレイや音楽療法グループ、ピアスーパービジョンなどが適切なタイミングと形式でカリキュラムに散りばめられていた。この経験をもとに、名古屋音楽大学研究紀要第38号「音楽中心的音楽療法におけるスーパービジョンの特色と学部レベルのセラピスト育成への活用」において、海外での音楽療法コースで取り組まれているスーパービジョンの特色と、とくに音楽中心的音楽療法のその活用について具体的に提案をした。具体的には、次の項目を挙げていた：1) ログの活用と応用、2) 継続的な音楽体験による学び、そして3) 個別化された育成のためのスーパービジョン。今回は、その実施及び成果をまとめながら、更なる提案と考案を掲げることとする。

1) ログの活用と応用

ログは、セラピストとしての観察力、聴察力（耳から得られる情報）、推察と洞察の力を高める為に不可欠である。また、捉える情報は主観的な基準となりがちである中で、いかに客観的な視点で記録を残していくかのスキルを高める為にも大切な学びのプロセスとなる。

Finer (2007) は、ログ作業の上で、音楽的要素、非音楽的要素など学生が注意を向けてログを書くという課題方式で取り組むことを提案している。これまで私は、フリーフォーマットで、学生が気づくことを学生なりの記述の仕方でも始めてもらい、個々の強みとスキルを上げるべき分野の見極めをしながら、個別にアドバイスをする方法を取っていた。この利点は、課題を個別化することで能力に合わせた対応ができること、そして早期から個別の課題に取り組めることである。しかし、学生自身がフリーフォーマット形式の中でやり方を模索する時間が長くかかることもあると分かった。そこで今回、Finerの方式を導入し、履修している学生全員に同じ課題に取り組んでもらうという方向付けを試みてみた。もちろん、その上で個別の課題も、並行してアドバイスの下に取り組んでもらった。

全体として、取り組むべき内容が定められていることで、ログ作業も取り組み易さを与えたという印象をうけた。また、ほとんどの学生にとって、非音楽的情報の収集の方が、音楽的情報の収集よりも優勢である（行いやすい）ことが明らかとなった。しかし、音楽的情報に着目するという課題の中で、セッション中も観察を行い、その後の振り返りにも、参加者の様子を音楽的に思い返す努力をする姿勢が生まれていた。またこうした取り組みにより、何を音楽的反応とするかというディスカッションも学生達の間で起こり、それぞれが課題に取り組む中で抱えた疑問や、他から教えられて気づく視点なども生まれ、互いにとって理解を深められる学びにつながったと捉える。

音楽的反応の捉え方と観察について

ログの取り組みは改善されたとは言え、もう一度練り直しが必要であると感じている。その理由としては、「音楽的反応」として捉えることが、個々人であまりにも違うことにある。何をもってして音楽的反応と観察するかは、可視化できるもの、可聴化できるものと様々ある。私自身がノードフ・ロビンス音楽療法や分析的音楽療法の特別トレーニングを受けていることもあり、今の自分にとっては自然と捉えられる情報も、訓練が必要であると認識することに意識的でなければならぬこともある。故に、学部レベルでどこまでトレーニングするかは、判断が難しいところである。

Hamatani(2018)は、Hesserの述べる音楽心理療法における3つのレベルを紹介している。

これは、ニューヨーク大学大学院音楽療法プログラムの中で紹介される内容から引用されているものである。Hesserによると、音楽心理療法のセラピーの実践には、1) Supportive Music Therapy (援助的)、2) Reductive Music Therapy (縮小、復元的)、3) Reconstructive Music Therapy (再構築的) の3つのレベルがあるとされている。Hesserの掲げる3つのレベルの詳細と、本学の学部向けカリキュラム及びコンピテンシーを比較するに、学部レベルで育成できる内容は「援助的」レベルの段階のみである。

視点を少し変え、Wheeler (1983) は、精神科医療における音楽療法臨床実践の3段階を考えてみる。Wheelerは、これを1) 支持的、活動志向の音楽療法、2) 再教育的、洞察的、心理過程志向の音楽療法、そして3) 再構築的、分析的、カタルシス志向の音楽療法として提唱している。精神科医療という分野に特化して3つのレベルを掲げているが、私はこれをある程度一般的な基準として、音楽療法の関りの段階として捉えられると考えている。例えば、支持的、活動志向の音楽療法は、セラピストは、クライアントの健全な行動と参加を促進するために活動の場を提供し、能動的な参加を「いま・ここで」の気づきを促していくとされており、集団歌唱、楽器演奏、音楽ゲームが想定される。もちろん音楽療法士は、機能的レベルと音楽的能力が様々なクライアントが最大限参加できるよう、活動内容を注意深く計画しなければならないと説明されていることも加えておく。この支持的、活動志向の音楽療法のレベルは、日本国内でポピュラーな高齢者や身体・知的障害者の集団音楽療法にも適応される内容である。そして、高齢者や障害児・者の集団セッションは、正に学部レベルの実践トレーニングでも重きの置かれる対象者領域とセッション形態である。

基本的に集団セッションを想定した育成において、学部生レベルでどの程度の観察力とリスニングスキルが求められるかの最低ラインは曖昧である。恐らく、私が音楽的記録にこだわる理由の一つが、私自身のトレーニング背景が音楽中心的音楽療法にあるからと言える。“音楽をすることそのものがセラピーになる”という考え方が下支えとなっている以上、どのようなレベルのトレーニングであっても、音楽の質を聴き取れたり、クライアントの反応を耳を頼りに行えたりするスキルがあれば、自然と音楽でなければ組み立てられない取り組みが生まれるからである。そのためには、音楽療法のセッション中にクライアントからどのような反応が生まれていたのか、現場で聴き取れていたものと、後の振り返りで気づいたものを、ログの作業を通して経験データとして蓄え、より繊細に対処できるセラピストへと成長して行くことへとつなげたい。

Lee (2007) は、リスニングのレベルを次のように上げている。

- ミュージシャンとして聴くこと
- セラピストとして聴くこと
- 人間として聴くこと

- 音楽を聴くこと
- 静寂を聴くこと
- 現実を聴くこと
- 創造性を聴くこと

ここに示された全てのリスニングのレベルには、それぞれの質と役割が与えられている。またLeeは、音楽療法士にとって多くのレベルで聴くことは、音楽療法士の責務であるとも語っている。集団歌唱や楽器演奏、音楽ゲームなどの設定に置いて、繊細な個別性の高い反応をキャッチすることは、個別セッションで行うそれに比べて遥かに難しくなる。しかし、音楽療法士であるならば、様々な目と耳を持って情報をキャッチすることが、クライアント（集団）にとって寄り添うセッションが展開できる重要な要素となるため、これからも工夫を重ねながら、リスニングスキルの向上へより良い育成方法を模索していく必要がある。上記のようなLeeが掲げるリストも、紹介することによって、学生にとってはログ作業の助けになることも知れない。ログの課題にこうした情報と捉え方を織り交ぜて、もう少しログのストラクチャーを作ってみたいと考える。

2) 継続的な音楽体験による学び

これに伴い、私はグループ即興の導入を行った。毎週、フィールドワーク実習の対象学生に限り、私がスーパーバイザーの立場で同席をし、ピアグループの設定でグループ即興を行った。

学生は、任意の楽器を準備し、グループ即興へ参加した。基本的にはフリー即興ではあるものの、実習段階やグループメンバーの関りや音楽への参与の仕方を考慮し、稀に私からテーマを提示し、方向付けを行った。即興において、スーパーバイザーでありながらも、私は“見守り”という立場に徹することとしていた為、基本的に音楽上の変化や展開のきっかけを作ることはせず、そこで起こっていることをサポートするという関わり方を取った。即興の後には必ずシェアリングの時間を設け、その場で感じたことや個人のプロセスなどをグループと言葉で共有することを行った。また、各回の即興における個人の感想を500～800字程度にまとめて提出することも課題とした。

印象的であったこととして、春学期と秋学期のフィールドワーク実習の設定（対象者やピアサポートグループの機能）が、既にグループの質を分けていたことで、即興もピアの関係の距離感も全く質が異なって表れ、グループ即興の役割も自然と違う結果をもたらした。具体的な違いについての詳細は、守秘義務の観点から紹介を控えさせて頂く。しかしながら、こうした条件の違いはありながらも、グループ即興を通じた体験的な学びの効果は、全員に確実に見られた。どちらにも共通している大切なことは、学生一人ひとりにとって、自己理解や自己洞察、セラピーについてのクライアントの視点やセラピストの視点、

音楽体験についての学びが着実に展開していたことである。グループ即興による学びの効果として挙げられるものは、次の通り：

- 感情のプロセス（個人、グループ）
- 自己との対話
- 境界線（バウンダリー）の理解
- 快・不快の理解
- 体験から学ぶ音楽コミュニケーション
- 体験から学ぶグループムード変化の即興への反映
- 所属感
- ピアとして経験するグループの一体感
- 受け入れ、受け入れられる体験によるチームビルディング
- チームワークの向上 など

今回、グループ即興を体験型学びの一手法としてカリキュラムに取り入れてみて、強く印象に残ったことは、手法がユニバーサルであることである。教育的視点を持って Music Therapy Group のような内容を行うにあたり、「集まったメンバーで音楽を即興する」という非常に大きな枠組みであることは、文化や設定に限定的な要素を与えず、だからこそニューヨークで私自身が体験したものと同一質の学びの空間が提供可能となると思い知らされた。文化的適用が現場で調整されるための余白があることで、学生も“海外の手法”というような考え方で臨むのではなく、自分たちの場所として、自然と自分自身の体験をもとに学ぶ姿勢が生まれていたと言える。また、参加者によって創られる“音楽コミュニケーション文化”が存在することで、メンバーは所属感を得やすい環境が自ずと創られていたと考える。

このため学生は、自らを無理することなくプロセスに投じ、感じたり考えたりしたことを通して学んでいた。これは提出されていた感想にも随所に表れていた。また、体験による学び（体を通す）ことは、自分のモノになるペースが、教員が教えて身につけさせるより速いことも事実として表れていた。例えば、グループ即興中に自らの体験をクライアントに当てはめて考えることに役立てたことで、対象者の体験を想像しやすくなっていた。また、対象者と関わる際の適切な工夫を凝らすことにもつながっていた。

そして、“変化すること”を身をもって経験できることで、臨床現場における音楽への信頼や、自らの関りから生まれる変化への可能性を肯定的な姿勢で受け止めている姿勢が伺えた。これは、非言語の表現方法の中で、自らがセラピーのような体験に身を投じ、腑に落ちる経験ができてこそその到達点であるとは私は考える。また、音楽を通して生まれた信頼関係は、ピアとして支え合うことや、開示するのに勇気を要する打ち明けに対しても、それを受け入れ、受けとめる器がつけられていた。私がリーダーシップを取らずとも、有

機的に互いを信頼し支え合うムードが培われていたのである。これまでのフィールドワーク実習では触れることのなかった範囲の悩みやシェアリングが、学生主体で展開していたことも、深く私の印象に残った。

Hesser (2001) は、音楽はユニバーサル・ランゲージでありながら、パーソナルな感情表現やコミュニケーションとしての音楽という内容になると、その質が異なり、こういった意味での音楽というのは、経験から培われる知識となり、ほとんどの音楽療法士は、クライアントにそうするよう求めることが想定されていても、実際に自分がその経験をできていないというのが現実である、と語っている。経験から生まれる知識は、セラピストの臨床に直接的に影響を及ぼす。また、何か自分にとって効果的で、何がそうではなかったのかを身をもって知ることは、セラピスト自身に合った手法と関わり方を見つける近道となる、とも述べている。これら全ての意味合いからも、今回試行した Music Therapy Group の手法を用いたグループ即興は、学生一人一人の感性を高め、成長のプロセスを加速させる絶好の場となることが、立証された。学生自身はそれほどまでに自己分析やプロセスの分析をする力が伴っていなくても、それぞれの場所で確実に成長し、多くを吸収したことは紛れもない事実である。故に、継続的な音楽体験による学びという意味での Music Therapy Group の試行は、大成功であったと捉える。

3) 個別化された育成のためのスーパービジョン

今回、フィールドワーク実習において、グループ即興などのグループプロセスに加え、学期中に少なくとも2回の個別フィードバックの時間を設けた。これにより、学生が個人的に抱えている相談事を聞いたり、様々な事柄に関して、私から直接言葉をかけたり共に悩むことができた。

この設定において印象的であったことは、個別スーパービジョンでは、臨床に関するこのみならず、プライベートな領域の相談事が浮上する学生が多かったということにある。私はあくまでスーパービジョンとして対応するため、中にはセラピーを受けるよう促すケースもあった。こうした過程も踏まえ、学生が個人的に抱えている問題や課題と向き合っている状況を知ること、その上でフィールドワーク実習を通して、学生一人一人が最大限の学びができるようサポートすることが可能となった。

また、ほとんど全ての学生が、他の学生の能力との比較で悩んでいることもよく分かった。学生それぞれが持つ長所や強みをきちんと伝え、自信につなげることも非常に重要なことであった。それによって、更なるチャレンジを後押しすることも可能となり、ピアノの前でのフィードバックにもメンタル面で耐えうる力が育った。例えば、ピアノ伴奏やセッションリーダーとしてのスキルについて、本人が“できなかった”“上手くいかなかった”と感じた場面について、グループの前であっても貪欲に学べるようになっていたり、仲間

にどうしたら良いと思うかと積極的にアドバイスを求め合ったりする姿も見られた。これは、互いの良さを認めながら、自分を過小評価し過ぎずに保てることで出来ていたのだと私は受け止めた。この背景には、個性や個別の能力を評価されることで自信を持てるようになっていたこと、そして肯定的に自分を認められるようになっていたことがあったと考える。こうした成長は、自ずとセラピストとしてのプレゼンスにも前向きに働いていた。

セラピストのプレゼンスを育成する

現場の仕事において、セラピストはさまざまなニーズを抱えた対象者と接することとなる。実践においては、セラピスト個人の考え方や生き方そのものが、“あり方”として表れる。公平性、興味、柔軟性、受容性、忍耐力、共感力、判断力、構成力、推進力、観察力、音楽スキル、対話スキル、対人スキル、知識、癖、得意・苦手等々が、一人の人間としてもたらす影響力は、臨床の場面において当然ある。

Hesser (2007) は、音楽療法士の養成において、「人間的質」を訓練すること、すなわち人間力を育てることにあると唱えている。しかし、学部生活4年間という時間の中でこの人間力をいかに鍛えるかは、時に指導者にとって非常に壮大なプロジェクトとなる。真摯に向き合う姿勢をもってしても、成長のプロセスに時間がかかることがおおよその前提となる。4年間という時間の中で、日々の取り組みや学びを乗り越え、脱皮するかのようになり成長を遂げる学生も居ることは確かである。しかしながら、学生の成績を判定する立場にある教員との関係の中では、成長を見守るという意味での“セラピューティックな空間と関係”の質を用いながら関わることに限度がある。

このようなジレンマの中、2019年に名古屋音楽大学で実施された横田友子氏によるドラムサークル体験会の公開講座は、私の目指す育成の構成に、ひとつの大きなヒントを与えてくれた。それは、学内における普段の積み重ねによって培われる信頼関係を土台としたサポートと、外部講師による単発的かつ集中的な、いわば起爆剤の役割を果たす学びの機会の二つの関係である。この二つが上手く機能することで、学生の成長が後押しされることが実現させられるのである。複数の生徒が達成した成果を交えながら、この興味深い連携について述べるとする。

ドラムサークル・ファシリテーター養成プログラムとの連携

ドラムサークル・ファシリテーター養成プログラムについて

ドラムサークルとは、打楽器（ドラム）をサークル（輪）になって感じるままに演奏する（VMCグローバルジャパンホームページより）という非常にシンプルな設定で提供され、参加者の音楽知識や経験は一切問わない参加型の活動です。1) フリーフォーム、2) 特定文化リズムを用いたもの、そして3) ファシリテートされたドラムサークルなど、3種類の

形があるなか、日本で一般的に普及しているのは、3番目のファシリテーターと呼ばれるガイド役が、参加者一人一人がもともと持っているリズムを引き出しながらリズムアンサンブルが展開していくドラムサークルである。コミュニティにおける様々なイベントはもちろん、福祉施設における音楽活動や、教育現場におけるドラムサークルも需要がある。日本国内には、ドラムサークル・ファシリテーターとして活動している専門家が複数いる中で、ファシリテーター養成プログラムも幾つか存在している。

横田氏は、ドラムサークル・ファシリテーションの概念を生み出した、ドラムサークルの創始者であるアーサー・ハル氏にトレーニングを受けており、ハル氏による理論をもとにファシリテーターの養成を行える日本で唯一の存在である。ハル氏の理論は、リズムアンサンブルに参加するサークル（参加者グループ）とファシリテーターの関係について、音楽的变化と変容を軸に理論が構築されており、音楽中心の哲学理念に基づく名古屋音大の音楽療法コースとの相性は際立っている。

2019年11月に行われた公開講座では、受講学生達はドラムサークル・ファシリテーションの基本の手ほどきを受けた。これには、受講生がリズムアンサンブルに参加すること、そしてファシリテーションの実践を練習の中で段階を追って体験することが組み込まれていた。まずはリズムアンサンブルの一参加者として、簡単なリズムであっても音楽としてグループへつながりが生まれる心地を味わい、一人一人の貢献はシンプルなことでも集合体となれば大きな表現の力につながる体験ができていた。これは、音楽の効果や力を理解するために授業で取り組むグループワークや、音楽療法グループのような設定とは違い、学生に解放感をもたらしていたようであった。現に、「みんな違ってみんな良いと思えた」「楽しかった」「やっぱり音楽が好きと思えた」などの感想が多く聞かれた。

また、ファシリテーションの基本の合図を幾つか練習する段階では、ポイントを押さえた解説を聞いた後に、参加者が実際にやってみることで学ぶ流れが作られていた。はじめはグループ分けされ、5～8名程の人数を相手に、一人ずつ順番にファシリテーションの練習を行っていった。いくつかこうしたエクササイズを続ける中で、参加者は徐々に参加者との関係の取り方のコツを身につけていく。そして、合図を出す際に大切な音楽的なタイミングの練習も、自然と含まれる形となる。こうした小規模編成での練習体験は、小さな成功を積み重ねることを可能とし、徐々にグループサイズが大きくなっても、成功体験に後押しされていき、最終的にはフルサイズのグループを相手に合図の練習をできるまでに成長して行く。

こうした段階的な取り組みのお陰で、数時間後には、サークルの中央へ出て合図を出すことへの抵抗が軽減され、むしろ勇気をもって楽しめるまでに成長する学生が多かった。学生には「真ん中に立った時、皆のサポートを感じられて嬉しかった」「(人)前へ出ることが怖くなくなった」「前へでることに自信がもてるようになった」などの感想が多く集

まり、短時間のトレーニングでありながらも、大きな影響力を残したことが明らかとなった。実際、トレーニングの数時間後に予定されていたフィールドワーク実習では、学生のプレゼンスが非常にポジティブで自然体であったことが未だに忘れられない。

更に私が目を見張ったのは、その後に開催された3日間におけるベーシック研修という、ドラムサークル・ファシリテーター養成のための研修においての学生の吸収力の速さである。この研修は任意参加のため、公開講座のように全ての音楽療法コース生が参加したわけではないが、複数の学生が参加をした。理論においても然り、実践でコツを掴みだすと、成長がどんどん加速し、プレゼンスが安定してしっかりしたものへと変化した。人前に立つことへの抵抗感が低くなり、ワークをする為に人とつながろうという前向きな気持ちでサークルの中心に立つことができていた。ファシリテーターとしてこの段階へ至ることは、セラピストとしてもプレゼンスを保ち、ポジティブに自ら奉仕する気持ちで関わろうとする姿勢が相手にも伝わるレベルにあることを意味する。それは、“こうであるべき”ではなく“(一緒に)こうしたい”という気持ちからアクションを起こし、それが良いエネルギーとして連鎖する力をファシリテーターに与えてくれる、そんな成長のプロセスにも感じられた。セラピストとしてリードしようとするのではなく、“一緒にどこかへ行けるかやってみよう”という気持ちで関わろうとしている、そういったリーダーシップの質の変化でもある。これは音楽療法士にとっても大切なマインドである。

この素晴らしいドラムサークル・ファシリテーター養成プログラムが、もしも定期的に学生の学びの機会として提供できるのであれば、普段の育成プログラムの流れと連動して、学生への大きな成長を与えてくれるチャンスとなり得る。人間力を育てる関りには、日々培われた信頼関係の中でのプロセスも重要でありながら、時に起爆剤のように大きなエネルギーをもって学生が脱皮するような成長の飛躍をサポートすることも大切である。しかし、先にも述べたように教員がセラピストの役割を担うことはできず、利害関係のない相手との密な時間が求められる。こうした前述全ての点において、ドラムサークル・ファシリテーター養成プログラムは、セラピーではないながらも、内的自己の成長にも、即興音楽体験による学びも、学生の個性にスポットライトを当てることにも大きな貢献が期待できる。さらに、ドラムサークル・ファシリテーター養成プログラムとの連携の場合、講師も学生もセラピューティックな関りを期待していない為、横田氏に学生の個人情報や内情を伝える必要がないことも、学生にとっての安心・安全な学びの空間を保証できる。

Hesser (2001) は、音楽療法を十分に理解するためには、個人的に探究し、音楽が変革を起こすような体験を自らの人生の中で見つけなければならない、と話している。ドラムサークル・ファシリテーター養成プログラムは、そのプログラム単体でも十分に素晴らしい学びと経験を与えてくれる内容であることは間違いないが、Hesser が説く、教育現場における自己体験型の学びの重要性を現実的に提供するひとつの形となれる期待が高い。

具体的な希望的想定は、例えば、2年に一度の定期的なスケジュールで3日間のベーシック研修を名古屋で開催できれば、学部並びに大学院生への育成の関りと組み立て方、教員としてのアプローチにもメリハリを付けて行うことができると思われる。現状、カリキュラムへの導入は考え難く、外部団体の研修を名古屋音楽大学で開催するというような仕組みが一番想定しやすい。名古屋音楽大学では、Bonny-Method of Guided Imagery and Musicのトレーニングを日本国内で初めて提供している。この手法に習い、例えば一般社団法人VMCグローバルジャパンとの独立契約を結ぶことで、環境が整えられる。これが可能であれば、名古屋音楽大学音楽療法コースの魅力は更に高まるとも言える。

まとめ

名古屋音楽大学研究紀要第38号「音楽中心的音楽療法におけるスーパービジョンの特色と学部レベルのセラピスト育成への活用」において、海外での音楽療法コースで取り組まれているスーパービジョンの特色と、とくに音楽中心的音楽療法のその活用について具体的に提案をした。試行してみた結果としては、概ね全てにおいて良い方向での結果が得られ、更なる発展や工夫につながる発見も生まれた。また、ドラムサークル・ファシリテーター養成プログラムとの連携を図れる進展が生まれれば、学生の学びの充実していくと期待できる。

参考文献

- Feiner, S. (2007) 「インターン実習スーパービジョンの道筋—スーパービジョンにおける人間関係の役割、力動、および諸段階—」 Forinash, M. 編著、加藤美知子訳「音楽療法スーパービジョン〈上〉」(pp. 123-146) 人間と歴史社
- Hamatani, N. (2018) 「ノードフ・ロビンス音楽療法の原点を探る」大阪プラザ音楽療法研究会資料
- Hesser, B. (2001). The transformative power of music in our lives: A personal perspective, *Music Therapy Perspectives*, 19(1), 53-58. *Self-Experience in Music Therapy Education, Training, and Supervision*, Edited by Bruscia, K. (2012) Barcelona Publisher.
- Hesser, B. (2007) 「音楽療法士になるために何を学んだらよいか」1999年3月国立音楽大学講演より、国立音楽大学研究所音楽療法研究部門編著「音楽療法の現在」(pp. 319-331) 人間と歴史社
- Lee, C. (2007) 「クリニカルリスニング」*The Architecture of Aesthetic Music Therapy*より抄訳、船橋音楽療法研究室年報 通巻6号 pp. 26-29
- VMCグローバルジャパン HP : <https://www.vmcglobaljp.com/> (2020年3月)
- Wheeler, B (1983) A psychotherapeutic classification of music therapy practices: A continuum of procedures. *Music Therapy Perspectives*, 1(2). 「音楽療法入門：理論と実践Ⅱ」W.B. デイビス他編、栗林文雄監訳 (2015)